

大きな家族

和歌山大学 1回生 濱田遥

世界の貧困を知った時、私は国際協力に興味を抱いた。本当に衝撃的だった。全身に鳥肌がたち、胸が熱くなり、なんだかとても泣きたい気持ちになった。

私が世界の貧困を知ったのは小学生の時だった。総合学習の授業の時間に、「世界がもし100人の村だったら」というテレビ番組を鑑賞した。その中では、インドネシアのゴミ山でゴミを漁って生計を立てている家族や、マンホールの中で暮らす少年がとりあげられていた記憶がある。インドネシアのゴミ山には、実際に女優さんが現地に赴いており、その表情は本当に臭そうだった。しかし、その女優さんは、どんなに臭くても決して鼻をおさえず、偏見をもった目で子供たちと接したりしていなかった。当時の私にはその姿が印象的で、「なんでかよくわからへんけど、そういう姿勢っていいなあ…」などと思っていた。

テレビの中では、当時の私とさほど年が変わらない少女が、毎日ゴミ山に赴き、世界中から運ばれてくるゴミの中からお金になるものをひたすら探していた。その映像を見ながら、先生が、「みんなは毎日食べるものがあって、学校に来て、こうやってテレビを見れてるけど、世界にはこんな風にゴミを漁って生活してる子もおるんやで」というようなことを言った。その言葉を聞いて、私は、なんだかやるせないような、申し訳ないような、悲しいような、とても複雑な気持ちになった。世界のどこかでゴミを漁る同級生と、その姿をテレビ越しに見ている、食べ物にも着る服にも困らずに、学校でみんなまで授業を受けている私。その両者を頭の中で思い浮かべてしまい、その姿があまりにも対比的で、「なんで生まれたところが違うだけで、同じ人間なのに、こんなに違うんや。なんでこんな思いをしやなあかん人がいっぱいおるんや。」と、とても胸が熱くなった。

小学生のころ見たあの少女は今でも毎日ゴミを漁って生活しているのだろうか。同じ地球の上で生活しているのに、少し場所が違うだけで、全く豊かさが変わってくる。食べるものに困り、十分に栄養がとれていない人がいる一方で、栄養の取りすぎで太りすぎている人もいる。それが私にはものすごく不公平に思えてならない。世界の歴史の関係で、発達してきた国とそうでない国があるのは理解できるが、生まれた環境によって個々の可能性が狭められるのはおかしいと思う。

私は今在学している和歌山大学の、WAPという国際協力のサークルに入っている。インドネシアやタイに渡航して、現地の人々と触れ合い、文化交流を行ったり、現地の環境をよりよくするための企画を行ったり、大学内で世界の状況について学んだり

している。私たちが行動したところで、世界の貧困がなくなるわけではないし、貧富の格差がなくなるわけでもない。しかし、実際に渡航した大学生はみな、充実感にあふれた顔をして帰国してくる。現地の人たちと仲良くなり、そこには確かに絆が生まれ、国籍は関係なく、人として、お互いがお互いのことを好きになって帰ってくる。私はこれが国際協力の一步であり、これこそが国際協力の土台だと思う。国内で募金活動をしたり、物の寄付をしたり、実際に学校がない地域に学校を建設したり、国際協力には様々な形があるが、その根底にあるのは、「人はみな、共に地球という家に住んでいる」というような広い漠然とした概念だと思う。同じ家に住んでいる以上、協力して生活するのは当たり前のことであるし、ごく自然な行為である。私は、自分の限られた生活範囲だけを見て日々を過ごすのではなく、もっと広い視野で世界の状況に常に目をむけられる人でありたいと強く思う。小学生のころ見た映像をきっかけとして、いま現在大きなことはできていないけれど、今は WAP で私ができる最大限を尽くしてもっと世界の状況を知り、自分なりの国際協力をしていきたいと考えている。